

1 研究課題

台湾・国立交通大学客家文化学院所蔵植松明石遺贈資料（略称：植松文庫）の整理とデータベース化

2 研究成果の概要

国立陽明交通大学客家文化学院に植松文庫として収蔵された植松明石氏（1923-2017）の資料は、資料の性質ごとに全点番号がふられ、客家文化学院により日本円で300万円以上をかけて基本台帳がつくられていた。資料はビニールに1点ずつ入れられて属性に沿って収納箱に収納されていた。すでに、文庫の利用申し込みと写真利用の申請書式も用意されている。2022年8月ようやく台湾に渡航ができるようになり、2022年12月末から2023年1月はじめにかけて、2月、5月と計4回、植松文庫を訪問して整理作業に従事した。資料構成はF（写真）、H（調査ノート、原稿類）、P（資料・コピー類）、S（印刷品・寄贈雑誌など）、W（手紙類など個人資料）、Z（雑）となっている。各収納箱の数量は以下である。

写真 F001～F007

調査ノート・原稿類 H001～H010

資料・コピー類 P001～P010

印刷品ほか S001～S013

手紙類など W001～W006

雑 Z001～Z009

資料が膨大なため、今期の作業は写真と調査ノート・原稿類の整理に絞ることとした。中央研究院民族学研究所に訪問學員として留学する益田喜和子氏、筑波大学院院生の大城沙織氏の協力も得て、写真の整理はF004～007の4箱、調査ノート・原稿類の整理はH008の1箱を終了することができた。

その結果、植松文庫の特色としては、植松氏が台湾で調査・収集した客家関連資料、長年日本の各地で調査したノート、写真がある。また、日本文化人類学会や日本民俗学会ほかにとって貴重な資料としては、国内外の研究者と交流を重ねたことで寄せられた資料（図書館や研究機関に通例収蔵されていない日本民俗学や文化人類学関連の研究会の写真、配布レジュメや各種調査報告書、研究者からの調査報告を含めた手紙類）が多量に含まれていることが挙げられる。

このほかに植松氏自らが実施した1950年代から日本の各地（奈良県、千葉県、東京都、神奈川県、沖縄県（沖縄本島、新城島、竹富島、石垣島、黒島ほか）鹿児島県（奄美大島・加計呂麻島・鹿児島郡十島村中之島など）、1970年代後半からは台湾の客家村落（新竹県の新竹市内、湖北、竹東、竹北など）での現地調査資料（フィールドノート・スケッチ・写真など）も重要である。

上記の作業を進めるにつれ、植松文庫が東アジア研究の基礎となるアーカイブと位置づけられることを明らかにすることができた。

研究計画の実施については、国立陽明交通大学客家文化学院秘書の陳品安氏、勤務先大学の研究

支援担当に大変お世話になった。黄紹恒前院長、簡美玲現院長をはじめとする国立陽明交通大学客家文化学院の皆様のおさまたげな心遣い、共同研究者の皆様からのアドバイスに深く感謝したい。

なお、報告書に記した「植松文庫」の利用や記念塔訪問を希望する方は、研究代表者のメールアドレス宛にまず連絡してほしい。

3 研究開始当初の背景

2017年6月に植松明石氏が逝去した後、ご遺族が知人を介して大学か研究機関への資料寄贈先探しを研究代表者に相談してみえた。研究代表者が同年9月に台湾に渡航し、台北の出版社・南天書局社長の魏徳文氏に打診したところ、2017年9月はじめに客家文化学院への受け入れが決まり、同月のうちに資料全点の送り出しをおこなった。その後、客家文化学院による基本台帳が作成され、資料の全貌が把握できるようになった。

台帳により確認できたことの一つが、植松氏による日本における調査資料が資料全体の9割を占めることであった。植松文庫内の客家関連資料、特に写真については客家文化学院において整理が可能なものの、日本人研究者も関与して整理するほうが詳細に地域や撮影時期などが判別できる可能性が高い。研究代表者と植松明石氏は45歳の年齢差があり、研究領域も異なるものの、研究地域は沖縄と台湾で重なっている。かつ、報告者は植松が勤務した跡見学園女子大学において学部生時代に、日本民俗学と文化人類学を学んでいる。教員を中心とする関係者の顔も見知っており、資料収蔵に関する経緯も踏まえると、整理作業も引き受けるべきではないかと考え、本研究計画を着想した。

4 研究の目的

国立陽明交通大学客家文化学院では、植松明石教授（1923-2017）の没後、2017年9月に寄贈された資料を「植松文庫」と名づけ、整理をしてきた。研究代表者は本プロジェクトを、植松教授の学術活動を顕彰し、各分野での活用を目指す目的のもとに構想した。本プロジェクトは、遺された資料のうち整理が未着手となっている日本での調査資料を中心に、文化人類学や民俗学の研究資料として活かされるように、資料・文物を整理し研究するものである。植松教授の遺品は、相続人であった甥の吉澤忠成氏から「寄贈したい」との意思を受けて、2017年9月に国立陽明交通大学黄紹恒教授と代表者が共同で遺品を検分し、客家文化学院が所蔵・管理するようになった。学院では台湾の客家委員会に助成を申請し、「客家資料の収蔵と再生：植松明石氏の新埔枋寮地域における客家集落調査を基盤として」（1年間）により、初期段階の整理をおこなった。さらに、台湾文化部の「新竹県国家文化記憶データベース」の補助を3カ月間獲得して、引き続き整理とデジタルデータベース化を進めてきた。2023年3月の時点までに、計300万円以上の費用をかけて基本台帳や専用の収蔵室が準備されたそうである。客家文化学院に所属する博士課程の学生たちが台帳のダブルチェックを実施しており、現在も作業は継続している。

今回の申請は、客家文化学院が進めている資料整理に日本側の研究者も関与することによって「植松文庫」の整理を進展させ、収蔵されている資料の属性や植松教授による調査の意図、後世の研究者にとっての意義をさらに明確にする目的がある。

5 研究の方法

2017年に日本から台湾に送られた資料は、57個の大小の段ボールにさまざまな年代と形式のものが詰められていた。台湾の国立交通大学客家文化学院において台湾の考古学的な観点に照らした整理基準を取り、植松教授のライフヒストリーも含めて保存すべく、各資料の規格、洋式、サイズ等も含めて記録した。資料は、植松教授が調査した当時の人々の生活や時代背景を示すものとして整理が進められてきた。2018年の年末には、植松教授の遺贈資料は2614件と確定した。57箱の資料は、(F)映像・録音・写真資料、(S)出版物、(H)手稿、(P)複写資料、(W)私物、(Z)その他、雑類に6分類された。資料は「一件も漏らさず」各資料をビニール袋に詰め、整理番号を振り、暫定的な目録を作成した。148頁の暫定的な目録には、各史料や文物に関する初歩的な解説を加え、さらに分類と区分を進めてきた。これらの作業を、客家文化学院では専門家の指導のもと日本語に習熟した大学院生1名とデジタル系の学生が共同であった。

本研究では、この基本台帳と整理された資料、植松氏の助手をつとめていた川北千香子氏が編纂された年譜をもとに、各資料を1点、1点、直接確認して台帳の情報補完を目指した。研究共同者は、植野弘子（東洋大学教授）、久部良和子（沖縄県平和祈念資料館）、宮岡真央子（福岡大学教授）、石垣直（沖縄国際大学教授）である。

6 研究成果

2020年6月に助成が決定され、2021年10月より6か月間、代表者の山本は台湾への学外研究を予定していたものの、2022年8月末まで台湾でのCOVID19の感染拡大、防疫対策により渡航ができなかった。こうした状況を踏まえ、2021年に台湾・中央研究院民族学研究所に所属して学外研究を実施した宮岡真央子氏を客家文化学院に派遣し、現状確認をしてもらった。また、渡航ができず研究計画を執行できないことから、植松基金管理委員会に相談し、2023年5月までの延長が認められた。

2022年7月ごろより、台湾への条件付き渡航が可能となり始めた。防疫対策のため、防疫ホテルの滞在を義務づけられてはいたが、2022年8月27日から9月20日、2022年12月25日から2023年1月9日、2月8日から2月16日、4月30日から5月9日の計4回、植松文庫を訪問して整理作業に従事した。うち、第1回と2回の滞在は、勤務大学の学外研究補完制度を利用することができ、予算を抑えられた。

8月27日に到着後、4日間の隔離を経て、8月30日より整理に着手した。植松文庫として収蔵さ

れた全資料は客家文化学院の校舎3階の専用室 HK321 で手厚く管理されていた。HK321 教室奥は大学サーバー室に通じており、24時間冷房が良く効いていて管理状態は良好であった。各資料の第一段階の分類は終了し、すでに資料すべてのリストが編成されていた。

すでに基本台帳は6分類に沿って編纂されなおされていた。資料構成はF(写真)、H(調査ノート、原稿類)、P(資料・コピー類)、S(印刷品・寄贈雑誌など)、W(手紙類など個人資料)、Z(雑)となっている。各収納箱の数量は以下である。

写真 F001～F007

調査ノート・原稿類 H001～H010

資料・コピー類 P001～P010

印刷品ほか S001～S013

手紙類など W001～W006

雑 Z001～Z009

現在は、客家文化学院が実施している作業は、博士課程の学生たちが全収蔵品とリストを照らし合わせる再チェックである。その再チェック作業に協力しつつ、整理を進めることにした。到着して改めて確認したところ、資料が膨大なため、今期の作業は写真と調査ノート・原稿類の整理に絞った。資料別分類はなされたものの、現段階では私的な資料・私的写真が多く含まれているため、一般向けの公開、利用に向けてはさらに時間を要する見込みである。現状を把握したのち、客家文化学院の窓口である簡美玲教授(現、院長代理)と協議し、文庫に含まれる私的な資料の選別については、山本が受け持つことにした。そして、申請書に当初記したデータベース編成は、現状に照らして整理の最終段階にずらすこととした。最終段階において、共同して重要な資料を中心とした目録を作成する方針も確認した。

その上で、作成されていた台帳に基づき、奄美・沖縄資料が多く含まれている H008 の各資料にコメントをつけることから作業を開始した。日本側研究者の視点や資料読解により、客家文化学院が作成した各資料の内容を補足するコメントをつける作業をすることで、利用者の活用度があがると判断したためである。8月は期間内に H008 に関する資料全 348 点に「分類箱番号、大分類・小分類、資料性質、資料形態、資料名、地域、時期、作者、資料詳細」のコメントをつけ、リストを完成させて作業終了とした。完了後、1日間の余裕があったので、リストを2度見直ししたうえ、F006 の写真の一部についてもコメントリストを作成した。

H008 と文書類リストを精査したところ、植松教授が台湾で調査・収集した客家関連資料、長年日本の各地で調査したノート、写真が収蔵されていた。特に注目したいのは、日本文化人類学会や日本民俗学会ほかにとって貴重な資料としては、国内外の研究者と交流を重ねたことで集まった資料(図書館や研究機関に通例収蔵されていないような日本民俗学や文化人類学関連の研究会にて撮影された写真、配布レジュメや各種調査報告書、研究者からの調査報告を含めた手紙類)が多量に含まれている点が把握できた。

F006 の写真を検討したところ、50代半ばの年齢に差し掛かっている山本が写真の被写体、撮影場所、撮影時期などのコメントを作成するのが適当と判断した。すでにネガフィルムやプリントなどに劣化が見られたため、共同研究者にも相談した結果、台湾の国立成功大学に留学予定の大城沙織氏(当時：筑波大学博士課程1年)に文書の整理作業を分担してもらい、中央研究院民族学研究所に訪問学員として留学する益田喜和子氏にも文書整理に関わってもらおう方針を立てた。今後も適任の大学

院生・若手研究者がいれば、積極的にプロジェクトに協力してもらうことにした。

2度目の滞在以降は、代表者の山本が写真の整理を重点的におこない、院生の二人には比較的属性が判別しやすいH（調査ノート・原稿類）の整理作業に関わってもらうことにした。2月22日に筑波大学博士課程1年（当時）の大城沙織氏が植松文庫を見学し、作業工程と資料の確認をおこなった。また、4月16日から21日にかけて慶應義塾大学博士課程3年生で中央研究院民族学研究所に訪問學員として留学している益田喜和子氏が作業に従事した。以降、写真はF004～007の4箱、調査ノート・原稿類はH008の1箱、さらに全体として疑問点のある資料に関するリストを含め、FとNにある資料とその属性情報についてエクセルを用いた一覧表を完成させた。

山本の4回目となる滞在最終日5月8日には、南天書局の魏徳文氏と古地図研究家の邱桃水氏の案内で、調査写真の撮影地となっている義民廟ならびに新埔を訪問した。現理事長の林光華氏や他の地域から選出された理事たちに挨拶し、2023年9月に改めて写真や調査ノートを元に植松教授の調査活動の足跡をたどる調査を実施したい旨を伝えた。その際、植松教授の調査に通訳として協力したC氏にも会うことができた。新埔では祖廟や媽祖廟、市場、天主教教会、墓地などの撮影地点を同定した。今後、植松教授のかつての調査地において被写体となった地域や人々に関する調査の目途をつけたうえで研究を終了した。

上述のように、山本は2回目以降の作業では写真類（ネガフィルム、ポジフィルム、プリント等）の点検・整理に取り組んだ。写真については、整理番号ごとに、「資料の種類、目的、大きさ、封筒・箱の有無、slide・negaの有無、封筒・albumなどの記載、撮影年月日、写真の枚数、色彩、地域、被写体・植松のメモほか、備考」の欄ごとに記入していった。その過程で1950年代から70年代に撮影されたと推定できるネガ・ポジフィルム、プリント全体の劣化を発見した。簡美玲教授と協議して、本助成金による整理と並行しながら、撮影が古い年代の写真よりデジタル化、データベース化を急ぐことにした。さらに、確認作業を丁寧に進めていくと、1950年代以降から60年代まで、奄美や八重山地方で撮影されたプリント写真は、用紙に各写真が貼られ植松教授の手で解説がほどこされたシートが作成されていることが判明した。判明する限りにおいて、nega、slideとprintなどの対応関係を記した。また、作成したリストに、各写真のキャプションや封筒のメモなども記載した。

こうした整理の結果を踏まえ、2024年4月以降6月2日まで公募されていた、国立民族学博物館が令和5年度「学術知デジタルライブラリの構築（X-DiPLAS）」プロジェクトに、プリントの元ネガ・ポジフィルムのデジタル化の共同申請をおこなった。今後も継続して申請を試みる予定である。

なお、植松文庫・年譜編成のための補完情報として、2022年10月24日に静岡県富士宮市二ノ宮共同墓地にある吉澤家の墓所内にある植松教授の記念碑にも足を運んだ。植松教授は「葬送の自由をすすめる会」会員であった時期もあって墓のかわりに記念碑を建てた、と甥の吉澤氏が説明されたとおり、小ぶりの白色の碑が建立されていた。場所の詳細に関心ある方は、研究代表者のメールアドレスまで問い合わせしてほしい。

7 東アジア研究および文化人類学にとっての学術的意義

これまでの整理を踏まえると、植松文庫の特色は日本民俗学と文化人類学会の1950年代後半からの学会史を辿ることのできる資料を多く含んでいることが指摘できる。植松教授自身の調査・研究資料はもとより、学会の大会や懇親会の写真、人類学者、民俗学者からの書簡、各研究会で配布されたレジュメなども多数保管されていた。特に東アジア関連の研究会のレジュメがよく残されている。

植松教授と80年代以降に調査や実習を共にした研究者、助手、学生の証言では、植松教授は「とにかく写真を撮影しなかった」と述べていたが、植松教授の調査は1950年代後半に本州（十津川村、青梅市など）ではじまるが、すでにカメラを携えて調査に赴いていたことが判明した。肖像権の関係から私的写真と分類した写真においても、1950年代より教員として勤務した香蘭女学校の同僚や学生、周囲の人々に積極的にカメラを向けていたことが確認できた。植松教授は、画像記録媒体でいえば、白黒フィルムからカラーフィルム、デジタルまで用い、35mmフィルムカメラ、35mmのハーフサイズが撮影できるカメラ、コンパクトカメラ、デジタルカメラにいたるまで機材が変化している。研究者として、各時代で最善とされた方式で調査記録をつづけてきたといえる。

写真としては、1950年代後半から1960年代の奄美・沖縄の写真が多く文庫に含まれていることが確認できた。今後利用する人の利便性を考え、撮影地域にタグをつけたところ、F006においては資料点数393点中、沖縄88点（主な撮影地は沖縄本島北部、伊是名島、久高島、来間島、宮古島、多良間島、石垣島、黒島、新城島、与那国島）、奄美大島と加計呂麻島16点、奄美か沖縄と推測される写真4点となっていた。1960年代初頭より八重山地方、特に新城島に重点をおく。60年代半ばからは、沖縄本島北部・奄美大島・加計呂麻島の調査も実施した。

植松氏の撮影写真は、宗教儀礼や葬制・墓制、御嶽にとどまらず、農耕、土地利用、家屋、船着き場、生活道路、店舗、運搬姿勢、子どもたちなど、村内の様子や日常生活の諸相を生き生きと撮影していて貴重である。特に、50年代から60年代の調査は、住民のほとんどがカメラを所有していない「離島」を対象としている。さらに、解説がつけられている写真もあり、コレクションの中でも地元の人々にとって重要な写真をデータベース化して公開することは、各地における資料活用や研究還元につながると考える。当時、植松教授が赴いた地域は、ほとんどの家庭にカメラがない時代であり、非常に貴重な写真となっている。調査は、調査地が急速に旧来の文化から変容する時期と重なっており、写真と調査ノートを照らし合わせた解析が今後重要になっていると考える。

今後は、沖縄県内や鹿児島県の奄美を中心とした博物館、公文書館や教育委員会などとの連携を模索すべきだと考える。客家資料に関しても同様であるがまずは植松文庫の整理を着実に進めることで、より東アジア研究および文化人類学にとっての学術的意義が明確になってくるであろう。

8 本プロジェクトに関連した研究実績（書籍、論文、学会発表等。出版・掲載や発表が確定しているものを含めてもかまいません）

山本芳美 2017「フォーラム 台湾・国立交通大学客家文化学院に植松文庫開設」『日本民俗学』296号：169-171

山本芳美 2023.10「台湾・国立陽明交通大学植松文庫の研究—植松明石による撮影写真に関する中間報告」（第75回日本民俗学会年会、2023年10月22日の発表を予定）